

庭園の町 津和野

庭園文化研究分科会 原 裕二

1. 津和野町の庭園の特徴

庭園文化研究会では、本年度は津和野町内の庭園を訪ね、その特徴や魅力について検討した。調査した庭は次のとおりである。

- ◆武家の庭・・・亀井氏別邸庭園(亀井温故館)
- ◆寺院の庭・・・永明寺(ようめいじ)
曹洞宗。吉見氏、坂崎氏、亀井氏と歴代津和野城主の菩提寺。
- ◆町家の庭・・・分銅屋七右衛門(椿家)、ささや(岡崎家)、財間家、田中家(沙羅の木)堀庭園

これらの庭には、以下に示すような特徴がある。

1. 例外なく池泉がある庭園である。

訪れた先で伺うと、池の水は津和野川から引き、家屋の下や脇を通って水路に排水しているとのことである。広大な池泉を持つ亀井氏別邸庭園はもとより、幅数mしかない「ささや(岡崎家)」の庭でも、水を引く仕掛けが施されていた。

一方、出雲流庭園では、原鹿江角豪農屋敷、出雲伝承館(坂田江角家)、松翠苑などのようにかなり大きな庭園でも池泉はなく、枯山水様式の庭である。

津和野の町並みは、津和野川に沿って細長く分布する谷底平野にある。出雲平野と違って傾斜があり、池泉の水を導水することも排水することも比較的容易である。庭に池を設けることは、自然な成り行きであったと考えられる。



左：原鹿江角豪農屋敷	枯山水様式の庭である。
右：ささや(岡崎家)	池泉というにはあまりにも小さいが、それでも庭の中央に細長い池があり、水が流れるようになっている。

2. 出雲流庭園で見られるような派手な石組みがない。

出雲流庭園で見られる石組みは、平坦な土地の中で、何とか立体感を出そうと工夫した結果である。庭の最も中央にある3つの立石組は滝を表現している。寿形松も含め、全体に垂直指向が強い。池泉を作ることが容易な津和野の庭では、自ずとそのようなこだわりはなくなったと思われる。



左上：斐川町庭園3 盛土を行った上に、さらに長い石を立てる。

右上：分銅屋七右衛門(椿家)

右下：永明寺庭園

石は多く使われているが、つくばいや手水鉢、飛び石、灯籠などが主体であり、出雲流庭園のような垂直指向は見られない。全体に平面的な庭となる。



3. 石組みにこだわらないかわりに周辺の山々を借景としてうまく取り込んでいる。

今回見た町家の庭では、青野山を借景とし、絵画の背景のような効果をもたらしていた。永明寺や亀井氏別邸庭園では、裏山を背景に利用していた。堀庭園では、人工の石組みを最小限に抑えるかわりに、裏山斜面の露岩を背景として見事な景色を作り出している。山に囲まれた津和野ならではの演出と考えられる。



左：財間家 中央遠くに、うっすらと見えるのが青野山。左の旅館の屋根がなかったら、なおよいが・・・

右：堀庭園 斜面の露岩(中生代の含礫泥岩)を石組みとして利用している。

4. 茶庭の露地を取り入れたような部分が見当たらない。

津和野でも茶の湯は盛んだが、松江の抹茶と異なり、煎茶が主流であると伺った。したがって、京都の茶庭を無理に模倣することなく、むしろ自由な発想で作庭できたと思われる。現在の庭の多くは、明治期に作庭されたものである。

本稿では、この中で最も有名な堀氏の庭園を取り上げ、津和野町の地勢や歴史と関連づけながら、庭園の特徴を考えてみたい。

2. 堀氏と笹ヶ谷鉱山

堀氏の歴史は、笹ヶ谷鉱山の歴史と重なる。

笹ヶ谷鉱山は、津和野から北北西に9kmほど行った砥石山を中心とする地域にある。地質は、約2億年前の中生代ジュラ紀の含礫泥岩、砂岩頁岩から成る。これを貫いて、石英斑岩や安山岩の岩脈が貫入し、接触交代鉱床(スカルンと呼ぶ)を形成している。

鉱物は、金銀を含む黄銅鉱が主で、硫砒鉄鉱、閃亜鉛鉱を伴う。これらの鉱石から、銅、銀、ヒ素、亜鉛が産出する。

益田市から鹿足郡、美濃郡にかけては、小規模であるが、接触交代鉱床の鉱山が多く、銅や銀、鉛などを産出している。石見銀山の灰吹法に用いる鉛は、この周辺から供給されたという説がある。笹ヶ谷鉱山は津和野藩の管轄ではなく、石見銀山と同じ天領である。

笹ヶ谷鉱山の沿革を以下に示す。

- ・1278～1287年(弘安年間) 発見・開坑
- ・1600年(慶長 5年) 大森銀山奉行大久保長安から堀與左衛門に鉱業が許可される。
- ・1733年(享保 8年) 火災が発生。本邸の門を建築。
- ・1762年(宝暦12年) 銅40tを産出。銅山師は十数人あったが、堀氏が次第に株を買収。
- ・1785～1788年(天明5～8年) 母屋の建築。
- ・1789～1800年(寛政年間) 坑道が深くなり、湧水が著しくなって事業不振となる。
- ・1804～1817年(文化年間) 排水工事を継続。岩質が堅固で、通気が悪く、工事は難航。
- ・1835年(天保 6年) 鉱山の建物が焼失。
- ・1842年(天保13年) 銅の生産2t。
- ・1872～1873年(明治5～6年) 松本升七夫妻により、黒色火薬による発破法が導入。
- ・1884年(明治17年) 工学士都野豊之進による近代化が促進。溶鉱炉、蒸気機関の採用。
- ・1897～1900年(明治30～33年) 堀藤十郎 楽山荘(客殿)を建築。
- ・1898年(明治31年) 鉱脈が尽き苦境に陥る。
- ・1909年(明治42年) 大鉱床を発見。大いに活気づく。
- ・1915年(大正 4年) 動力を電気に変える。大正5年の銅生産量564t。和楽園を作庭。
- ・1918年(大正 7年) 鉱業界の不況。
- ・1921～1931年(大正10～昭和6年) 亜ヒ酸の製造(石見銀山ねずみ取り)。
- ・1933年(昭和 8年) 日本興業と堀藤十郎との組合経営。銅及び亜ヒ酸の生産。
- ・1936年(昭和11年) 銅453tの生産。
- ・1949年(昭和24年) 堀氏が脱退。その後、わずかばかりの生産が行われる。
- ・1971年(昭和46年) 閉山。鉱業権放棄。

3. 堀庭園の概観

堀庭園は、枯山水様式の母屋の庭と、池泉廻遊式の楽山荘(客殿)の庭、川を隔てて南にある和楽園に分けられる。庭園の美しさだけでなく、明治期の粋を集めて建てられた楽山荘の建築が見事である。以下にその概観を示す。



母屋の庭 枯山水様式



楽山荘入口 ここは少し露地風のしつらえ



楽山荘の2階 レトロでモダンな手すり



楽山荘庭園(2階から) 池泉廻遊式

4. まとめ

庭は生き物であり、そこで暮らす人々の思いや生活様式、用途などが色濃く反映される。

手入れを怠ると、亀井氏別邸庭園のような立派な庭でも、誠に味気ないものになる。その点、町家の庭は現役であり、立派に手入れがなされている。生活に根ざした個性あふれるよい庭園であった。

町家の庭はほぼ1箇所集中しており、駅にも近く、訪れるのに便利である。期間や時間を定めて、庭園めぐりコースを設定すれば、ある程度の集客が見込まれる。

堀庭園は、庭園、建築ともにすばらしい名勝である。周辺に飲食店や観光施設を整え、PRを十分に行えば、お客の呼べる観光地となる。

しかし賑やかな行楽地とするか、ひっそりとしたたたずまいを残すかは、好みが分かれるところである。十分な配慮が必要であろう。



床の間も天井板も、長さ2間の1枚板でできている。

5. 参考文献

島根県地質図説明書編集委員会(1985)：島根県の地質，島根県，459-464.
森本信男，砂川一郎，都城秋穂(1975)：鉱物学，岩波書店，407-410.